

教科外学習開発部会 実践報告



「附属小学校が大好きだよ」

小学校 宮里智恵

(1) 学 年 小学校 第1学年2学級 40名

(2) 総合単元設定の理由

小学校は1年生の子どもたちにとってたくさんの異学年や大人の人々と生活する初めての大きな集団生活の場である。子どもたちはそれまで経験したことのない大きな集団の中で大勢の人々とかかわりながら生活することに対して期待と不安をもっている。

1年生を迎える小学校の側は、1年生の不安感を少しでも和らげるために掲示物や花壇などにさまざまな工夫をする。こういった物的環境を整えることは1年生にとって喜びと楽しさをもたらすものとなっているが、それだけで1年生の子どもが安心して学校に来ることができるようになるわけではない。人が新しい環境の中で安心して自己を発揮することができるようになるためには、そこで出会う人々との温かい関係が育まれることが必要である。小学1年生の1年間、子どもたちは自分を取り巻く大勢の人々と直接かかわる体験を通してその人々の存在に気づき、その人々が自分に向けてくれている温かい思いを感じる中で、本物の安心感をもつようになるのである。

本実践はこういった小学1年生の状況を「かかわり学習」の時機ととらえ、「附属小学校が大好きだよ」という単元を設定して、子どもたちが身の周りの人の存在に気づき、その人々への親しみと附属小学校への愛着の気持ちを醸成することをねらいとして行ったものである。

本稿ではその単元の中の二つの実践について述べる。

実践例1の『さわやか班みんなの気持ちを感じよう』は、「1年生を迎える取り組み」の一つとして5月下旬に行われた「おむかえ遠足」を題材にしたものである。特別活動領域の「児童会活動」や「学校行事」などと連携した総合単元的な「道徳の時間」の学習を行うことで、1年生に温かくかかわった2年生以上の子どもたちの思いを1年生に感じさせ、学校生活への安心感をもたせることをねらいとした。

実践例2の『たくさんの人に出会ってきたね』は入学後8ヶ月を経た時期に、これまでどんな人々に出会い、どのようにかかわり合ってきたのかを振り返ることによって、自分たちが安心して小学校に通えるようになったこと背景には親しくなった人の存在があることに気づかせるとともに、小学校への親しみの気持ちを一層持ち、今後も学級や学校での生活を楽しく送ろうとする意欲を育むことをねらいとした。

(3) 学習計画 全9時間

- 第1次 おむかえ遠足 (特別活動・道徳の時間) 3時間 (5月)
- ・おむかえ遠足の準備 (特別活動) 1時間
 - ・おむかえ遠足の実施 (学校行事)
 - ・おむかえ遠足の絵を描こう (特別活動) . . . 1時間
 - ・さわやか班みんなの気持ちを感じよう (道徳の時間) . 1時間 (実践例1)

- 第2次 わたしのお知り合い（特別活動）・・・・・・・・・・2時間（7月・10月）
 第3次 たくさんの人に出会ってきたね（道徳の時間）・・・・・・・・1時間（12月）

（実践例2）

- 第4次 附属小学校へご招待（特別活動・道徳の時間）・・・・・・・・3時間（2月）
 ・幼稚園さんを迎える計画をたてよう（特別活動）・1時間
 ・ここが附属小学校だよ（特別活動）・・・・・・・・1時間・課外
 ・幼稚園さんを迎えてみて（道徳の時間）・・・・・・・・1時間

（4）実践例1 「さわやか班みんなの気持ちを感じよう」（道徳の時間）

①日 時

平成15年5月29日（金）

②主 題

おむかえ遠足の日の出来事や入学後のエピソードを交流することによって、小学校という新たな場、集団における自己を取り巻く人々の存在と、その人々が自分に向けてくれる温かい気持ちに気づく。 2-（4）

③題 材

「おむかえ遠足の日」（自作資料）

④子どもの実態

小学校への入学時、子どもたちにとっては学校生活の全てが初めてであり、戸惑いや不安感を持ちながら学校に来ていた。同じ学級の子も同士は日に日になじんでいくことができたが、さわやか班（本校の縦割り班）という異年齢での活動には、不安気な表情を浮かべる子どもも多かった。

それでも、入学からひと月を過ぎるころになると、毎日の清掃活動を共にしているさわやか班のメンバーとは顔見知りになり、学校という大きな集団の場にも慣れてきた。本実践の事前調査として、入学からひと半月となる平成15年5月24日に行ったアンケート調査によると、「附属小学校が好きですか？」という問いに対して40名全員の子どもが「はい」と答えている。「附属小学校のどんなところが好きですか？」という問いに対しては、「たくさん遊べる。」「勉強がおもしろい。」「仲良しの人がいる。」などの答えが多かった。この頃になると、入学当初に抱いていた戸惑いや不安感はかなり少なくなり、安心して学校に通ってきていることが分かる。しかし、そのように安心して学校に来ることができるのは、自分を取り巻く多くの人々の温かいかわりがあったからであることにはまだ気づいてはいない。

⑤授業の概要

おむかえ遠足でさわやか班の子どもたちが1年生への温かい思いを中心に活動したことに気づかせるために、この「道徳の時間」は遠足の日から1週間後に行った。

導入では、さわやか班遠足の様子を撮影したビデオを見せた。子どもたちは、「あ！遠足のビデオだ！」「楽しかったよう！」などと歓



写真1 「あ！ 楽しかった遠足のビデオだ！」

声をあげながらビデオを見て、そのときの気持ちを想起していた。

次に、子どもたちが第3次で描いた「遠足の絵」の中から数点をプロジェクターで拡大して提示し、それを描いた子どもに説明を求めると、どの絵にも自分以外の方が描かれていることに気づかせた。

T：これは誰と何をしているところですか？

P：さわやか班のお兄ちゃんと、お菓子の分けっこをしているところです。嬉しかったです。

P：さわやか班のお姉ちゃんたちと海で貝殻を拾っているところです。嬉しかったです。

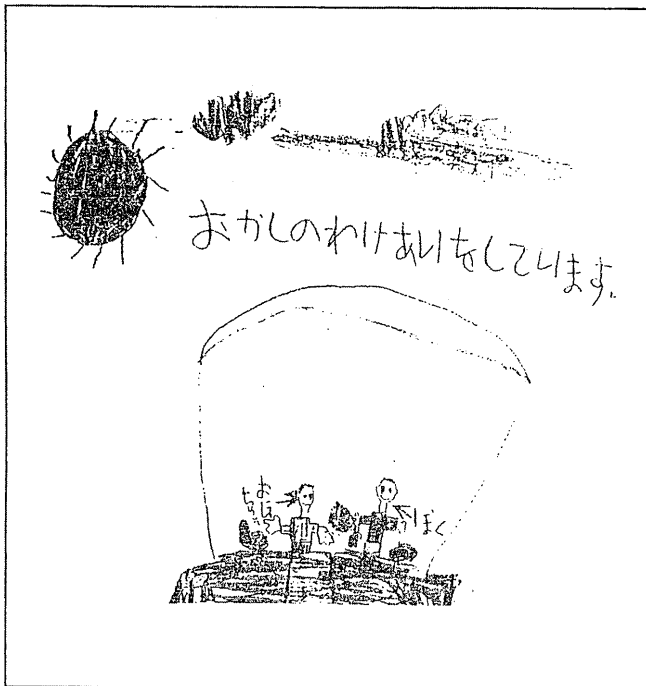


図1「お兄ちゃんたちとお菓子の分けっこをしているところだよ。嬉しかったよ。」



図2「さわやか班のお姉ちゃんたちと海で貝殻を拾っているところだよ。嬉しかったよ。」

続いて、遠足の日に仲良しになった人や困ったときに助けてくれた人などを尋ね、お互いの班のエピソードを交流させるようにした。遠足の日にはさわやか班単位で活動するため、同じ学級の子ども同士はもちろん、授業者もそれぞれの子どもの様子をつぶさには知らない。そこで、いくつかの班のエピソードを交流させることで、いろいろな人との交流があったことに気づかせようとしたのである。

T：誰と仲良しになりましたか？

P：4年生の〇〇さんと仲良しになりました。

T：何か困ったことがあって助けてもらった人はいませんか？

P：滑り台が怖くて困っていたら、5年生のお兄ちゃんと一緒に滑ってくれて滑れました。

P：船が揺れて海に落ちるかと思ったけど（おむかえ遠足は全校で船を借り切って因島へ行った）、お姉ちゃんがかまえてくれていたので大丈夫でした。



写真2 「お姉ちゃんに助けてもらって大丈夫でした。」

さらに、遠足の日、本学級のある子どもが海辺で靴をなくしたときに、さわやか班の2

年生から6年生までの子どもと一緒に探しているところを撮影したビデオを見せ、「このお姉ちゃんたちはどんな気持ちで靴を探していると思いますか？」と尋ねた。自分たちを取り巻く人々の思いに気づかせるための発問である。1年生の子どもにとって、自分より年上の子どもの気持ちを想像してみることは容易ではないと思われたが、子どもたちからは次のような答えが返ってきた。

P：(靴をなくして) かわいそうだなあ、と思ってくれていると思います。

P：早く見つけてあげたいなあ、と思ってくれていると思います。

P：ビデオを見ると〇〇君(靴をなくした子ども)は裸足でしょう。裸足で海岸を歩いているんだから、足が痛いだろうなあ、と思ってくれていると思います。

これらの発言は、自分たちが日ごろから大切に思われていることに改めて気づかせてくれるものであった。

また、靴をなくした子どもが「靴はお兄ちゃんが見つけてくれたよ。見つかってうれしかった。」と発言したことで、年上の人から温かくかかわってもらってうれしいなあという気持ちを共有することができた。

続いて、あるさわやか班のインタビュービデオを見せた。これは、遠足の前日に撮影しておいたもので、お迎え遠足に向けた思いを2年生から6年生までの子どもたちに語ってもらったものである。ビデオの内容は、

○ 港に着くまでの道で、1年生さんが転ばないように手を引いてあげたいです。

○ 船の中では、風で帽子が飛ばないように注意してあげたいです。

○ 迷子にならないように、声をかけてあげたいです。

○ 荷物が重くて歩けなかったら、荷物を持ってあげたいです。

など、どの言葉にも、1年生が初めての遠足を十分に楽しめるようにとの思いが込められていた。

このビデオを見た子どもたちは、授業者の「みんなの班のお兄ちゃんやお姉ちゃんたちも、こんな気持ちで遠足に連れて行ってくれたんですね。ビデオを見てどう思いましたか。」の問いかけに、一様に「やさしいなあ。」「うれしいよ。」と語った。遠足の日が楽しかったのは、自分を取り巻くいろいろな人々の温かい気持ちとかかわりがあったからなのだ、と気づいていったのである。

その後、小学校への入学以来、いろいろな人たちに助けられたエピソードを交流した。これは、おむかえ遠足に限らず、日ごろの生活の中でも温かくかかわってもらっていることに気づかせようとしたものである。交流されたエピソードには次のようなものがあった。

○ 掃除の時にどこをやるか分からなかったんだけど、お姉ちゃんに教えてもらってよく分かりました。

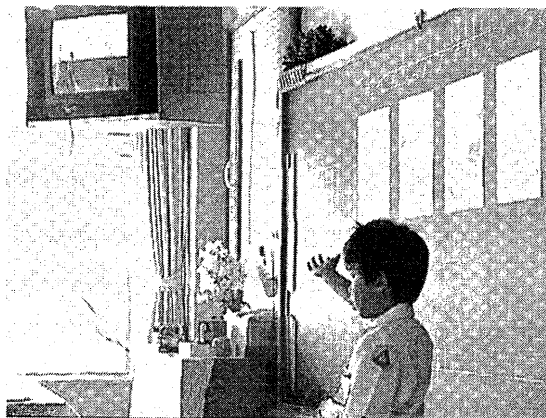


写真3 「裸足で歩いて足が痛いだろうなあと思ってくれていると思います。」

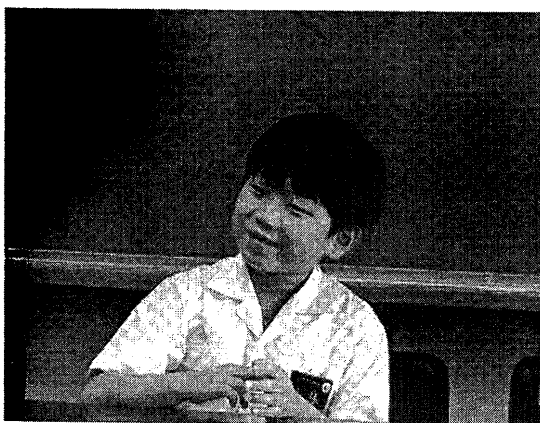


写真4 「迷子にならないように、声をかけてあげたいです。」

- 5年生さんと宝探しをしたとき、お姉ちゃんが手を引いてやってくれたのがうれしかったです。
- 私が、溝にはまったとき、5年生のお姉ちゃんが靴と靴下を洗ってくれました。このエピソードは保護者からも特に嬉しかったこととして次のような声をいただいていたものである。

あるとき、〇〇（子どもの名前）が遊びに夢中になって溝に足がはまってしまいました。そのとき、5年生のAさんが保健室に連れて行ってくれ、汚れた靴や靴下を洗ってくれました。汚くて自分で触るのもいやなのに、お姉ちゃんはとってもよくしてくれた事をととても感激していました。

こうした保護者の声も紹介しながらエピソードを交流した。

授業のまとめとして、入学以来いろいろな人に温かくかかわってもらいながら毎日をごしていることへの気づきと、これからもさわやか班やその他のみんなと仲良くしていきたいという気持ちを持てるような声かけをして授業を終えた。

⑥授業をふり返って

本実践は、小学校という大きな集団に初めて所属した1年生の子どもたちに、自分を取り巻く人々の存在とその人々が自分に向けてくれる温かい気持ちに気づかせることで、学校生活への安心感を持たせることをねらいとした。「おむかえ遠足」という共通の体験を題材にし、その日の様子をビデオや「遠足の絵」で思い出させたり、実際にあったエピソードを交流させたりすることで、子どもたちは、遠足の日の気持ちを生き生きと想起しながら発言していた。また、年上の人たちの思いを、エピソードを元に考えさせたり、実際のインタビュービデオを見せたりすることで、自分たちが遠足を楽しめたのは、このようにいろいろな人々の温かい思いがあったからであることに気づくことができた。さらに、日ごろの生活へと目を転ずることで、入学以来の毎日の生活も、多くの人々の思いに支えられていることにも気づくことができた。これらのことは、「おむかえ遠足」という学校行事がどの子どもにも共通の体験であったことに加えて、いろいろな方法でその日の出来事を想起させながら、授業の中で共有化していったプロセスが、子どもたちに新たな気づきをもたらしたものと思われる。

（5）実践例2 「たくさんの人に出会ってきたね」（道徳の時間）

①日 時

平成15年12月5日（金）

②主 題

入学した頃の不安な気持ちと安心して学校に来ている現在の気持ちを比べる活動を通して、入学後に出会った人々とその人々との交流によって生まれた学級や学校に対する肯定的な感情を確認し、今後も学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しく送ろうとする気持ちを持つ。 4－（3）

③題 材

「たくさんの人に出会ってきたね」（自作資料）

④子どもの実態

子どもたちは入学時には大きな集団に所属したことで戸惑いを感じていたが、月日を経る中でそれにも慣れ、友達や知り合いをたくさんつくって楽しく学校生活を送っている。事前調査（平成15年11月13日 40名）によると、「附属小学校が好きですか？」という質問に対し、40名全員の子どもが「はい」と答えている。そして、「附属小学校のどんなところが好きですか？」という質問に対しては複数回答で52.8%の子どもが担任や友達の存在を、25%の子どもが一輪車や校庭など物や設備の存在を、22.2%の子どもが行事などの存在を挙げた。また、「2学級（自分の学級）が好きですか？」という質問に対しても40名全員の子どもが「はい」と答えている。そして、「2学級のどんなところが好きですか？」という質問に対しては複数回答で95%の子どもが担任や友達の存在を挙げていた。

⑤授業の概要

導入においては、一人ひとりの子どもに幼稚園や保育園の頃の先生からの手紙を渡した。

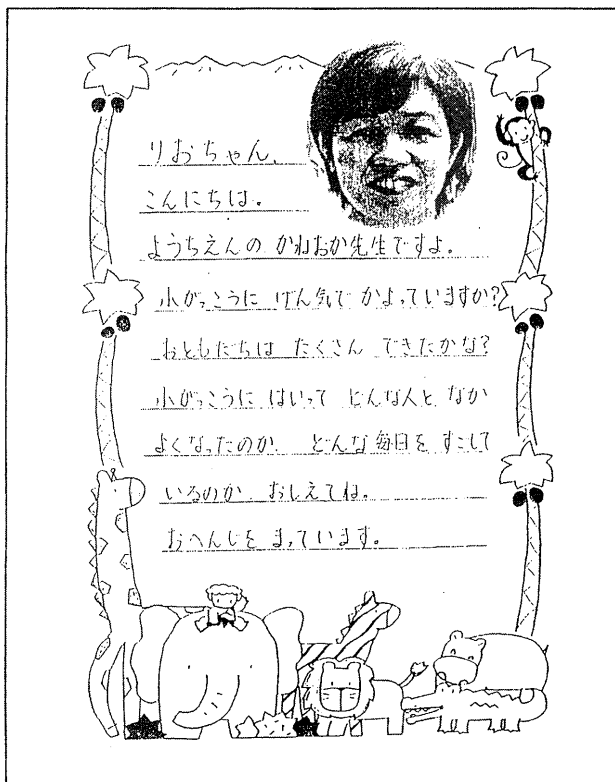


図3 幼稚園や保育園の先生からの手紙

子どもたちは8ヶ月前に卒園してきた幼稚園や保育園の先生からの顔写真付きの手紙を、驚きと共に受け取り、喰い入るように見つめて読んでいた。中にはすぐに机の中にしまい、「大切だから家に帰ってゆっくり開いてみる。」という子どももいたほどである。

手紙をくださった先生たちに入学後に知り合いかわった人たちのことを返事を書いて知らせようと働きかけたあと、まずプロジェクターで小学校への入学の日のビデオ映像を見せて、そのころの気持ちを出し合わせた。子どもからは次のような発言があった。

- ・どんな勉強をするのかなあ、とわくわくしていました。
- ・バスで一人でどうやって帰ればいいのかと困りました。
- ・仲良しの友達ができるのかなあ、と心配でした。

この中で特に、小学校に入って心配だったことや困ったことがどの子どもにもあったこ

手紙の内容は図3のようなもので、子どもたちが小学校への入学後に会った人々とのようにかかわりを深めてきたのかを振り返り、そのことを手紙の返事を書いて幼稚園や保育園の先生たちに伝えようという意欲を生むことを意図した。

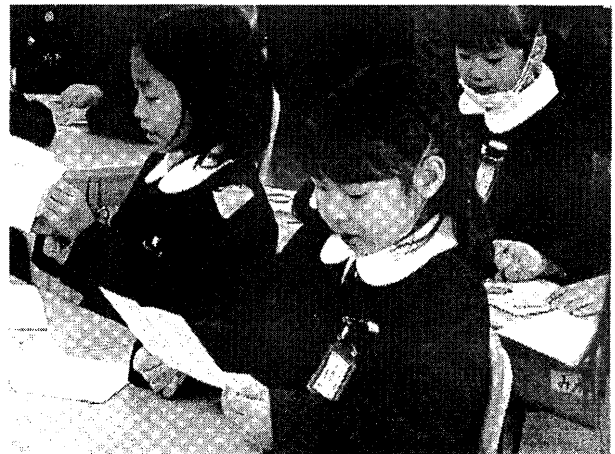


写真5 「なんと書いてあるのかな。」

子どもたちは7月に比べて10月のカードには枠からはみ出さんばかりに知り合いが増えていることを見つけた。

続いて、その知り合った人たちとはどんな楽しい思い出があるのか、どんなうれしい出来事があったのかを考える時間をもった。言わば質の上でのかわりを問うたのである。子どもたちからは

P：教育実習の先生たちや違う幼稚園の人たちとも出会えたし、宮里先生とも出会えたことがうれしいです。

P：友達ができると、休憩とかに遊ぶだけじゃたりなくて、朝、早く学校に来て遊びたいくらい仲良くなりました。

P：たくさんの友達ができからは、早く起きて、朝ご飯を急いで食べて、一つ早いバスに乗って、早く学校に行きたーいと思って・・・(中略)・・・〇〇君、〇〇君遊ぼう！と誘って、裏校庭でケイドロ(おにごっこ)とかをして、休み時間が終わると「えー！もう終わり？もっと遊びたい！」となって・・・(中略)・・・楽しいです！！

P：わたしがベランダで転んだときに〇〇さんが助けてくれてうれしかったです。

等の発言が出された。入学後の8ヶ月間には知り合った人たちとの温かいかわりがたくさんあったことが交流されると、子どもたちはそのことを早く幼稚園や保育園の先生方への手紙に書きたいという意欲を持った。そこで子どもたちの顔写真入りのカードを配布し、返事を書く活動に入った。子どもたちは大変積極的に手紙を書き、授業時間を過ぎても書き続ける子どもが多くいた。子どもたちが書いた手紙の返事の例を図6や図7に示す。



図6 子どもが書いた返事の例

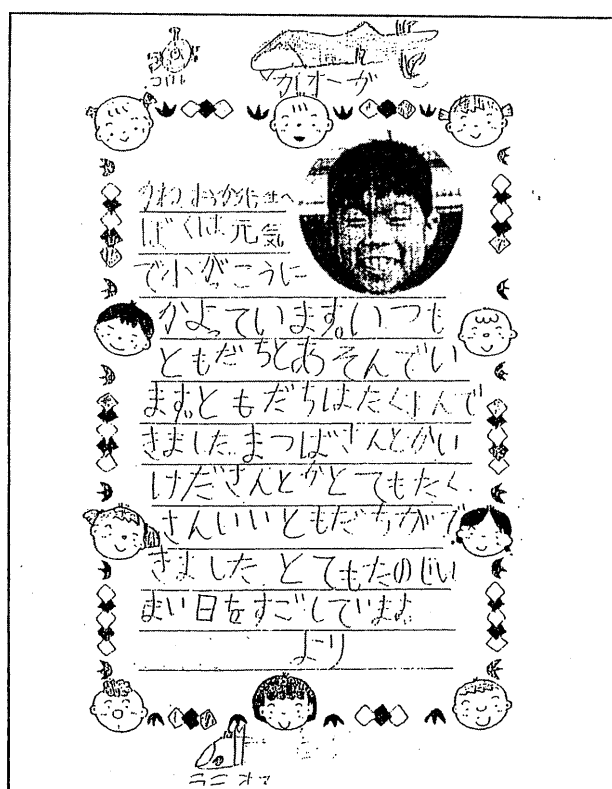


図7 子どもが書いた返事の例

授業者は後日、これらの手紙を子どもたちの幼稚園や保育園の頃の先生に届けた。それぞれの先生方は、文字が書けるようになり表現力も身に付けてきた子どもたちの成長の様子を感じ、大変喜んでおられた。

⑥授業を振り返って

本実践は、入学から8ヶ月を経た時期に行った。小学校という新しい集団の中で子どもたちなりに努力をして知り合いを増やし、また温かい関係を築いてきたことの喜びを、入学までの時期を支えてくれた幼稚園や保育園の先生方に伝えるという形で表現させようとしたものである。

相手に何かを伝えようとするとき、そこには伝えたい思いと伝えたい内容の両方が必要である。本時は道徳の時間としてのねらいを「学校・学級愛」としていたので、ねらいに迫るための方法として幼稚園や保育園の先生に伝えることにしたのであるが、伝えたい思いと内容をどのように子どもたちに持たせるかに意を用いた。

つまり、学校や学級への愛着の気持ちを子どもの側から引き出し共有化させていくために、入学式の映像や7月と10月に書きためていた「お知り合い」カードを提示したり、子どもの生活経験を交流させたりする時間をもったのである。

子どもたちが書いた手紙の返事をみると、どの子どもも小学校に入ってからどんな人と出会いどのようにかかわりを深めてきたのかを紙面によく表しており、これらの方法は概ね功を奏していることが分かる。中には、「今では附属小学校が大好きで、元気に通っているから安心してね。」「寒い時期なので先生も風邪を引かないで。」などと、相手の先生への気遣いを表現した子どももいた。

このように相手への意識を持つことができるほどに成長してきた子どもたちが、2月には次年度に1年生となる幼稚園の年長児を附属小学校に招待し、小学校での授業の様子や給食時間の様子を見せる。入学時に抱いていた不安を毎日たくさんの人とかかわり合う中で乗り越え、出会った人と温かい関係を築いてきた子どもたちが、その経験を生かしてどのようにして後輩たちに接していくのか楽しみにしているところである。

(6) 成果と課題

1年生の子どもたちが、小学校という未知の場において他者や集団と豊かにかかわる力を身につけていくためには、他者や集団と実際にかかわる体験が必要である。

本単元は、年間を通してそのプロセスを追い、またその体験を価値づけていこうとしているものである。架空のお話などによっても、自分を取り巻く人々の存在とその人たちの思いについて感じたり考えたりすることはできる。しかし、今回のように直接体験したことを題材にすることによって、一人ひとりの子どもたちは、より具体的に感じたり考えたりすることができ、単元のねらいに一層迫ることができたと考えられる。「道徳の時間」を総合単元的に扱うことの有効性を感じることができた。

1年生の子どもにとっては、1年間に会うことの多くが初めてのことであり、その全てが社会性の伸長に寄与できるものと考えられる。今後も、いろいろな機会を捉えてそれらを意図的に組み合わせ、授業化していくことで、子どもたちの社会性を一層育てることができるよう、新たな学習開発に取り組みたい。

「リーダーとして ～さわやか班 おむかえ遠足を通して～」

小学校 村上 忠君

(1) 学 年 小学校 第6学年 74名

(2) 総合単元設定の理由

本校には「さわやか班」という1年生から6年生で構成される縦割り班があり、清掃など日常の活動の他に、自伸会（本校児童会の名称）活動を行っている。さわやか班は毎年編成替えが行われる。これは子どもたちの人間関係を広げていこうと考えているからである。そのさわやか班のリーダーを務めるのが6年生である。リーダーの6年生にとって最も大変な時期は、新たな学年が始まる4月である。これまで頼りにしていたリーダーの6年生は中学生になり、班員たちも新しくなっているので、新たに人間関係を作っていかななくてはならない。また「新入生を迎える会」「自伸会入会式」「おむかえ遠足」と、新入生お迎え関係の行事が続く。

これらの行事に関して、どのようにして新入生を迎えるか、何をしたら新入生は喜んでくれるか、6年生は原案を作り、新さわやか班の班員たちをまとめるというねらいをも持ちながら、さわやか班会議を開く。

この時期の6年生にとってみれば、他学年とのふれあいを通して新入生の不安を少しでもやわらげようと努力すると同時に、無事に終わってほしいというのが本音である。

新入生お迎え関係の行事の中で「おむかえ遠足」は最後の行事である。それまでに6年生は、さわやか班のワッペンの図案を他学年の意見を取り入れながら考えたり、班旗のデザインを考えたりする。それらのデザインが決まれば、さわやか班で集まり、ワッペン・旗作りを行う。学年に準じて役割分担をするのもリーダーの大切な仕事である。さわやか班活動を行う準備をするために、6年生は休憩時間など利用しながら、打ち合わせを進めている。このような活動を通して小学校の最高学年であるという意識やリーダー性を育てているのである。

そこで本単元では、「さわやか班 おむかえ遠足」の各班の目標を達成するために、リーダーとして自らどのように考え、どのような行動をするかという視点を意識させながら進めていく。その中で5年生までの「さわやか班 おむかえ遠足」でのことを写真資料などから思い起こし、これまでの遠足と今年の遠足の違いを実感としてとらえさせていく。そしてリーダーとしての振り返りを行うときに、他学年の遠足の振り返りを知る活動を通して、自分たちの行動の意味や価値をとらえさせていく。他学年のことを考えて行動したつもりでも、相手はそうは受けとめていなかったり、こうすれば良かったと思ったことが、肯定的にとらえられていたりすることもある。そのような活動を通して、リーダーとしての資質の向上に加え、相手や集団のことを考えた行動ができるように育てていくことをねらいとした。

(3) 学習計画 (全5時間)

- 第1次 おむかえ遠足の準備 (特別活動) 3時間
- 第2次 リーダーとしてどう考え, 行動するか (道徳の時間) 1時間
- 第3次 おむかえ遠足 学校行事
- 第4次 リーダーとして遠足を振り返ろう
～そしてこれから～ (道徳の時間) 1時間

(4) 実践例 「リーダーとして遠足を振り返ろう
～そしてこれから～ (道徳の時間)」

①日 時 平成15年5月29日 (金)

②主 題

「新入生を迎える会」, 「自伸会入会式」, 「おむかえ遠足」などの新入生お迎え関係の行事を「さわやか班」を中心に企画運営をする活動を通して, 自分の役割を自覚し, 協力して主体的に責任を果たすとともに, 集団のリーダーとしてどのように考え, どのような行動をとるべきかを判断し, 行動化することができる。4-(1)

③題 材

「リーダーとして ～さわやか班 おむかえ遠足を通して～」 (自作資料)

④子どもたちの実態

本学年の子どもたちも, 5年生の3学期から, リーダー的存在として6年生からさわやか班を受け継いだ。その間に「6年生を送る会」の企画運営などを通じて, リーダーとしての必要な資質を養ってきた。それゆえに, 6年生となった時には, 学校やさわやか班のリーダーという自覚を個人差はあるにしてももっている。しかし, まだこれまでの6年生の模倣の段階である。行動する場面においても, 自ら考えて行動しているとは言い難い。またおむかえ遠足の目標を見ても, 「楽しい遠足にする」というものが多く見られるが, 何をどうしたら楽しくなるのかということについては, そこまでの意識を持っていない。抽象的には捉えているが, 具体的な捉えができていないのである。よってリーダー的な動きはしているが, リーダーとして何をどのように考え行動すればよいのかということが捉えられていないのである。

⑤授業の概要

リーダーとして参加した今年の「さわやか班おむかえ遠足」は, 参加する心構えにしても, 態度や行動にしてもこれまでの遠足とは違っていたことを振り返らせるために, 子どもたちが1年生・2年生のときの「おむかえ遠足」の写真を見せた。

とても懐かしい写真であり, 子どもたちからそのときの遠足のエピソードが出された。海に入って服をぬらしてしまったことや, 帽子を風で飛ばされたこと, 海に流れるスイカを不思議そうに眺めていたこと, 暑さのためにもっていったお菓子が溶けてしまって困ったことなど, いろいろな思い出がよみがえってきたようであった。

T: 楽しい思い出がたくさんあるね。まだありますか?

P: 1年生のときに, お弁当を食べようと思ったら, 箸が入ってなかったから, それを

見た6年生の班長さんが、自分の割り箸を半分に折ってくれました。

という発言をきっかけにして、6年生の班長の思い出を出し合った。

P：海につかって遊んでいて濡れたんだけど、そのときハンカチを持っていなくて、困っていたら班長がハンカチを貸してくれて、いっしょに拭いてくれました。

P：海に入らず濡れになったときに、着替えを手伝ってくれました。そして荷物がいっぱいになったのを見て班長さんが持ってくれました。

P：すごい荷物が重いときに班長さんが手伝ってくれたのがうれしかったです。

T：いろいろな思い出がありますね。楽しかったですねえ。

P：(口々に)うん、うん楽しかった。おもしろかった。

これまでの遠足を振り返りながら、いろいろなエピソードを紹介し合って笑ったり、班長さんにお世話になったことを懐かしく思い出したりした。

そして全員が口々に「遠足は楽しかった。とても楽しかったし、おもしろかった。」と話している時に、

T：今年の遠足は楽しかった？

とたずねてみた。すると子どもたちは、一斉に

P：いやー。楽しいというより疲れた。

P：そう。疲れたねえ。

T：おっと……。ちょっと詳しいところ教えてくれる？

P：はい。遊んでいる時に、私がちょっとほかのところを見ていた際に、2年生がころんでけがをしまして、かわいそうでした。

P：私の班に足にけがをした子がいて、おんぶしていたら、班員のみんなが「班長、がんばれ」と応援してくれたんだけど、楽しいというわけには……。

P：そりゃ、楽しくないよねえ。みんなで遊ぶ時も、ちょっととした際に、気がついたら誰かがいなくなってた。

P：今年ほくたちは、6年生なのでほかの学年のことも見ないといけないし、自分のこともやらないといけないから、疲れました。

T：なるほど今年6年生だから……。

P：お弁当を食べ終わって、アスレチックに班で行く時に、3年生がお菓子を食べていたので注意をしたりしました。

P：私たちの班の2年生が海に入って、びちょびちょになって、服を着替えさせたり、靴がなくなったので探したりと、大変でした。

P：班が男子、女子と別れて、勝手に行動してしまって、班をまとめるのに苦労しました。

P：いつも言うことを聞いてくれない3年生に注意していたら、その間に2年生がいなくなって困りました。

P：アスレチックで遊ぶ計画をしていたのに、1年生が歩くのがもういやだと駄々をこねるので、仕方ないから山の上のアスレチックまでおんぶしていきました。

T&P：えー、あそこまで？

P：私は1年生と2年生を連れていました。1年生を見ると真っ赤な顔をしていたので、この暑さでしんどいんだろうな。大丈夫かなと心配でした。

遠足の楽しい思い出話から、一転して遠足の時の苦勞話に変わってしまった。1年生から5年生までの遠足と、6年生での遠足は子どもたちにとって「かなり違う」と言う。

その違いについて、

P：1年生から5年生までのときは、自分がやりたいことをやっていたらよいというところがあったけれど、今年は6年だから、自分がやりたいことがあっても我慢して、他の学年のことを考えなくてはならないから疲れました。

P：5年生までの時は、原案など全部6年生が考えてくれていたけれど、今年は私達が6年生だからそれを全部やらないといけないから大変でした。そして、遠足で遊ぶ時も、自分が遊ぶより、他の班員を見てなくてはならないので、大変でした。

T：ここへ全部のさわやか班の班員さんの「振り返りプリント」があります。

P：えー

P：見たい。見せてくれるんですか。

P：見たいような見たくないような。

T：じゃ配るよ。1班さんから・・・。

P：わあ。

T：じゃあ、みんな班員さんの「振り返りプリント」を読んでどうでした？

P：海で遊ぶ時間が少なくなってしまって、みんな残念がっていたのだけど、振り返りには「とても楽しかった」と書いてくれていたのでよかったです。

P：班のことが気になって、なかなか遊べなかったんだけど4年生が6年生ともっと遊びたかったと書いていたので、もっと遊んであげればよかったと思いました。

T：あなたは何が気になっていたのですか。

P：1年生や2年生が、迷子になったり怪我をしないように気にしていました。



「こっちだよ～」リーダーは大変なのだ



見たいような見たくないような

P：1年生さんが、「お兄さんやお姉さんとお話ができうれしかった」と書いてくれました。もっと遊んであげたらよかったかなと思っていたのですが、「とても楽しかった」と書いてくれていたので、うれしいです。

P：5年生さんが書いてくれていたのだけれど、「よくまとめてくれてありがとう」と書いてくれていました。「こういうリーダーになりたい」と書いてくれていたので、うれしいです。

T：さて、今の気持ちどうです。リーダーていったいなんですか。

P：リーダーはみんなをまとめて最後にみんなが楽しかったといえるようにする。

P：最後にみんなが楽しいとかうれしかったという班の人の気分や雰囲気を作る人。

P：みんなを楽しめるようにがんばって行って、失敗しても次にがんばる。

P：他の人がうれしかったとか楽しかったということを知ってうれしくなる。

P：みんながそれぞれ違うので個性や性格を大切にしてみんなをまとめていくのがリーダーだと思います。

今年の遠足は「楽しいというより疲れた」、リーダーとしての本音が出た。しかしリーダーの喜びは、リーダーでなかった頃の喜びとは違うものであることを実感したようである。

⑥ 授業を振り返って



みんな楽しんでくれたようだ

てはならない。時には班員のよくない行動に対して注意しなくてはならないこともある。けれども「おむかえ遠足」は楽しかったのである。その点について、子どもたちの振り返りカードから見よう。

今年の「おむかえ遠足」は、昨年度までのものとはちょっと違う。それが子どもたちの感想であった。子どもたちの「おむかえ遠足」後の振り返りカードを見ると、ほとんどが「とても楽しかった」に○印をしているが、授業の中では「楽しいというより疲れた」と言っている。一見矛盾しているようであるが、これがリーダーとしての喜びである。

自分のやりたいことを我慢しながらでも、班員のことを考え行動しなく

～前略～

三原に帰ってきて、楽しかったというより、疲れたと思う方が大きかったと思います。その後、班の人の感想文を読んでもみると、ほとんどの人が楽しかったと書いていたので、とてもうれしくなりました。今年の遠足は、自分のことはできなかつたけれど、班の人はとても楽しんでいたので、よかったです。前の班長も副班長もとても疲れたと思います。でもしっかり班のためにがんばってくれたんだなとわかりました。自分もしっかりと班のことを見ていきたいです。

5年生までは参加する楽しさと、自らが楽しむという喜びであった。しかし6年生は、他者を楽しませる喜びである。そして班員たちの振り返りカードを見たことにより、自分たちの行動が認められていることがわかった。それがリーダーとしての行動をさらに強化していくのである。

(5) 成果と課題

「おむかえ遠足」の前に、リーダーとしての目標をたてるだけでなく、目標に対してどう考えどう行動すべきかという具体的なところまで検討させたことが、行動化に向けて有効であった。また振り返りを行うときに、さわやか班全員の振り返りカードを見せたことで、自分たちが他学年からどのように評価されているのかがわかった。そして、それがきっかけとなり次の行事に向けての意欲化につながることができた。しかし他学年のことを思うあまりに、他学年の楽しみを優先させ、自分たちも楽しむことができなかつたようである。それが「今年の遠足はちょっと違う」「楽しめなかった」という振り返りに表れている。今後は他学年も楽しみ、自分たちも楽しむということを考えさせていきたい。リーダーが楽しく行事に参加しない限り、他学年も結局は楽しむことができなくなるのである。

またこの時期の6年生はリーダーとなって日が浅い。これから日常のさわやか班での掃除や、各行事を通してさらにリーダーとしての資質を育んでいく。そして卒業する時に、自分とさわやか班とのかかわりを振り返り、「小学校生活の6年間の成長はさわやか班とともにあった」ことを実感させ、さわやか班の持っている意味や価値を他の学年に伝え、卒業させたいと考えている。

「見る！観る！マイスクール附属小」

小学校 下野 素文

(1) 学 年 小学校 第3学年6学級 39名

(2) 総合単元設定の理由

本学園は、幼・小・中の校舎が同じ敷地内にあり、多くの子どもたちが幼稚園から中学3年生までの12年間を共に過ごす。その中で、自伸会（本学園児童会の名称）が計画し、さわやか班（小学校1年生から6年生の縦割り集団）で実施する活動や幼小中が一体となった行事もあり、異学年での活動が盛んである。具体的には、日々のさわやか班そうじや遠足、スポーツ集会、秋の運動会、ペア学年でのふれあい活動などがあげられる。そのため、本学園の子どもたちの特徴として、男女を問わず仲が良く、異年齢の子どもに対しても思いやりや責任感をもって温かく接することができるなどがあげられる反面、12年間の学年の構成員にほとんど変化がないことにより、お互いの見方が固定的になり、友人に対する新たな認識を持ちにくいという面も見られる。

小学校3年生の子どもたちは、今まで上級生のお世話になることが多く、いろいろなことをしてもらったり、教えてもらったりすることで楽しく活動することができた。また、3年生になってからは、いろいろな活動の中で自分より下の学年を意識し始めることも多くなり、自分はどんな役割を果たしていくのか、今何をすべきかなど少しずつではあるが、自覚できるようになってきた。あわせて、行事や活動に参加する中でそれまでにあまり感じることはなかったそれぞれの活動のよさに気づき始める子どももでてきている。

本単元では、こういった子どもたちの実態をもとにしながら、さまざまな他者や集団と豊かにかかわることを意識した総合的な学習にしていく。計画では、運動会の「椿」に焦点をあてて、長い伝統があり、小学校と中学生の女子全員がいっしょに踊るよさなどを感じまとめしていく中で、さらに学園のほかのよさにも目を向けさせていく。そのために、調査隊をつくってグループでアンケートやインタビューをして調べさせていき、他者とのかわりをもたせていく。また、道徳（学校愛）の学習も重ね合わせて考えさせることにより、自分たちの学校に目を向けさせていく。中間発表会では、よさについて保護者からもアドバイスをいただくことにする。昨年までペア学年だった中学校1年生とも交流会をもち、アドバイスをもらう中で、他者や集団と豊かにかかわる力をつけていきたいと考える。さらに、12月の学園開放日に、自分たちでまとめたことを発表していく中で、かわりあうことの喜びや充実感を味わい、合わせて達成感を共有させていきたい。そして、1月には中学1年生の総合的な学習「三原学園へようこそ」に参加し、今度は中学生の学習内容の評価をしていく活動でかわりをもたせていく。

(3) 目 標

- 自分たちの考える学園のよさについて関心をもち、人とのかわりを大切にしながら進んでグループで調べ、多様な方法でまとめることができるようにする。

- 自分たちが調べてみたい学園のよさを見つけ、解決のための方法を見だし、必要な情報を活用して、相手を意識した発表をすることができるようにする。
- 友達と協力して調べたり発表したりすることを通して、かかわりを深め、友達のよさを見つけることができるようにする。

(4) 学習計画 (全30時間 9月～12月に実施) 資料1を参照

(5) 実践例

①第1次 どうして「椿」を踊るんだろう

単元の導入に必然性を持たせるために、運動会の演技種目の「椿」に注目させることにした。「椿」は、小学校1年生から中学校3年生までの女子が踊る身体表現で、80年以上前から行われているもので、本学級の女子は、1・2年生の時、お姉さんたちといっしょに実際におどっている。最初の授業は、次の通りである。

T: 今、運動会の練習で「椿」を踊っているけど「椿」ってなんのこと?

P: 花のことだと思います。

P: つばきという木があるから、その木の名前からとったおどりです。

P: 歌の中にあるように椿の花がさいたところを踊っているのだと思います。

T: どうして女子だけで踊るの?

P: おどりだから女子だけだと思います。

P: わたしのお母さんも踊っていたし、昔から決まっているからだと思います。

P: 男子は、「若い力」(小学校5・6年と中学生の組体操)があるからです。

T: じゃあ、ほかの学校でも「椿」を踊っているの?

P: (確信が持てない様子で) よその小学校ではないと思います。附属小だけだと思います。

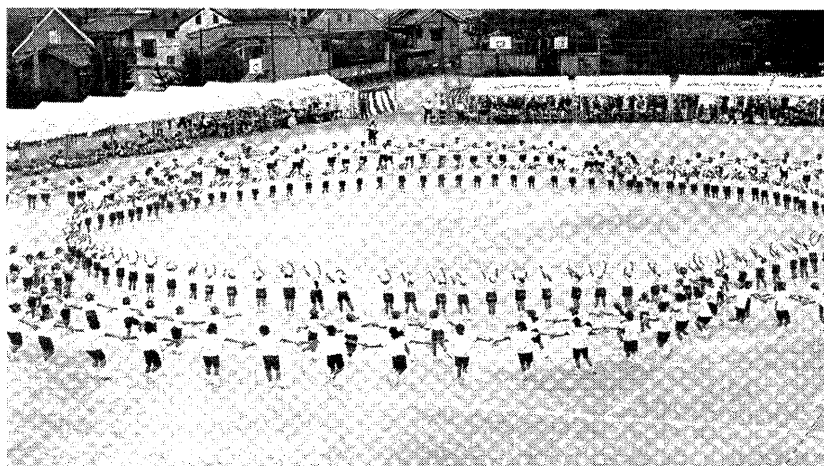
その後、「いつごろどうして始まったのか」もたずねたが明確な答えは返ってこなかった。ただ、お母さんも踊っていたということから、かなり前から踊られていたのではないかということになった。予想していたとおり「椿」について、あまり考えたこともなくほとんど知らないというのが実態であった。

そこで、どうすれば「椿」のことが詳しくわかるのかということで、今、実際に「椿」の踊りを指導していただいている以前本校に勤めておられた先生に聞いてみることにした。次のような流れで進めていった。

◇踊りの先生に「椿」のことを聞いてみよう◇

- ・昨年度の「椿」のビデオを鑑賞する
- ・先生のお話を聴く
- ・「椿」のことについての質問をする

初めに昨年度(本学級の子どもたちが2年生の時に実際に踊った)のビデオを見せると



すごくきれい！高い所から見ると
椿の花びらのかたちをしているよ

驚きと歓声があがり、予想以上の反応であった。ビデオは、高い所から全体の様子がわかるように撮られていたため、子どもたちは初めて「椿」の全体像がわかり、その美しさに対するものであった。今まで、見ている方も踊っている方も平面的にしかとらえきれていなかったようであった。その時点で強い関心をもち、さらに先生のお話を聴くことができた。

その中で、「椿」の始まった経緯やエピソードなどいろいろなことが詳しくわかった。子どもたちからもたくさんの質問がだされ、先生の方から一つひとつの質問に丁寧に答えていただいた。

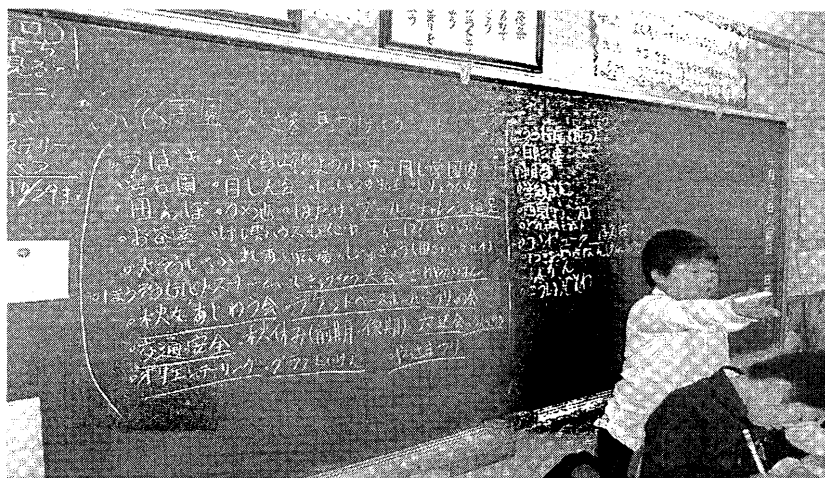
そして、教室で「椿」のよさについてまとめていった。

- ・椿は90年近くも前から踊られていたこと。
- ・小学校1年生から中学校3年生までが楽しく、きれいにおどっていること。
- ・先輩が、ずっと伝えてきた伝統であること。
- ・男子も「若い力」という演技ができたこと。
- ・多くの人が毎年楽しみに見に来て喜んでもらっていること。

など、よさとともに附属小の伝統も感じることができ、「椿」に対する見方も変わってきた様子であった。

②第2次 学習計画をたてよう

前時の学習をふりかえり、もっとほかに附属小のよさはないか考えさせていった。子どもたちからは、たくさんの意見が出された。よさの理由としては、附属小にあってほかの学校にないであろうものや自分たちが生活していて楽しいものや役に立っているものをあ



たくさんの「よさ」がだされたよ

げる子どもがいた。この中から、実際に調べていくことのできる内容かどうか、本当に附属小のよさなのかを考えていった。その中から10のテーマにしぼってグループを作り、調査隊として調べ学習をしていくことにした。

10の調査隊は次のとおりである。

- | | |
|------------|-------------|
| ・秋の運動会調査隊 | ・せいふく調査隊 |
| ・行事だいすき調査隊 | ・資料館調査隊 |
| ・学園のひみつ調査隊 | ・ふれあい広場調査隊 |
| ・お茶室調査隊 | ・秋休み調査隊 |
| ・昔のものしり調査隊 | ・チャレンジ遠足調査隊 |

本単元を進めていくにあたって、学習の内容とかかわりがある道徳の学習を取り入れることにした。主題は、「自分たちの通う学校のよさに気づくとともに、みんなで学校を大切にしようという気持ちを育てる（学校愛）」で、学校についての自分たちの考えを見直す資料として「ボールを食う木(学習研究社3年)」を扱った。そして展開後段には、本校の裏校庭にある子どもたちに遊び場の「お城」(本学園小学校の裏校庭にある遊具を子どもたちはこう呼んでいる)について、写真を見せて考えさせた。

T：この写真は何だかわかりますか。

P：あっ、お城じゃ。すごいたくさんの人。

P：お城を作っているんだ。

P：コンクリートに手を押しつけている。

P：今でもたくさんの手形がのこっているよ。

P：あの手形のあるところを知ってる。あの人たちがしたんじゃないね。

P：あれは、きっとむかしの6年生が作ったんだ。

P：ミキサー車までよんで作ったんだ。

P：ぼくたちも作ってみたいな。



裏校庭の「お城」はみんなの力でできたんだ

子どもたちは、いつも遊んでいる身近な遊具が先輩の手で作られたことに大いに驚いていた。そして、自分たちも何か残していきたいという思いを持った子どももいた。

T：ところで、いつごろの写真だと思いますか？

P：92年前、60年前、20年前・・・

26年前の写真であることを知らせると6年生の年齢にたし算をして写真に映っている子どもたち

が38歳ぐらいであることがわかると、自分の父親と同じ年齢であることに気づき、さっそく家に帰って「お城」のことについて聞いてみる子どももいた。

わたしは、道徳の時間に写真を見て、はじめてお城が作られたときのことわかりました。子どもたちが実際に手で作っているのを知って驚きました。学校にあるものは、

みんなの力で作られていることがわかったので、これからも大切にしていこうと思います。

この学習を通して、学校にあるいろいろなものに対して、もっと深く見ようとするのが大切であることに気づくようになった。また、先輩たちが残してくれたものに対して、自分たちの学校のよさとしてこれからも大切にしていきたいと感じられるようになった。

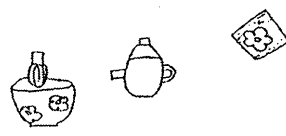
③第3次 調査隊をつくって調べよう。

よからたら いいです!	お茶室の アンケート	小学生別 年れい	男・女 オ	年令
----------------	---------------	-------------	----------	----

Q1: お茶をのむとどんな気持ちになりますか。
()

Q2: お茶室でじまんしたい事はありますか。
()

Q3: あたらいいと思う事はありますか。
()



ありがとうございました

お茶室調査隊のアンケート

調査隊をつくって調べる場面では、それぞれのグループでアンケートをとったりインタビューをしたりしていった。グループによっては、小学生だけでなく、学園の先生や中学生にも聞くグループもあった。また、保護者や地域の方々ともかかわりをもつこともあった。さらに、写真を取り入れるために、取材の時に初めてデジタルカメラをもって取材するグループもあった。どのグループも意欲的に活動していった。しかし、調べることの内容が、テーマからずれていたたり、よさがはっきりしなくなってきたりしたグループもあり、修正しながら取り組んでいった。



お茶室にいて、茶道クラブの活動の様子を取材したよ
たくさんのよさを見つけたよ

④第4次 発表会の準備をしよう

自分たちの調べていることが、本当にテーマにそったよさになっているのかを評価してもらうために、参観日に中間発表会を開いた。その中で、他のグループの友達や保護者の方から、アドバイスをもらった。内容は、各調査隊がテーマにそったよさを見つけられているかどうかについてしぼっていった。それらをもとにグループごとに話し合いをして、自分たちが考えていたよさについて考え、もう一度見直していく作業をしていった。保護

者からのアドバイスによって、今まで自分たちが感じていなかったよさに気づいて、さらに内容を修正していくグループや友達や保護者の「よく見つけている」というプラスの評価で自信をもってまとめの作業に進めるグループもあった。

まとめていくところでは、多様な方法を考えさせた。前期に行った総合的な学習では、本や壁新聞によるまとめ方に限られていたので、今回はパンフレットやポスターや新聞など自分たちの調べた内容に合うまとめ方を考えさせた。また、子どもたちの中から、マルチメディアの時間に習っているパソコンを使って文字や絵を作り、表現したいというグループもあり、挑戦させることにした。

すべてのグループでまとめができあがってから、昨年度までペア学年だった中学校1年生と交流会を開いていった。それは、お互いがよく知っていることや中学校1年生も同じように総合的な学習で「三原学園へようこそ」に取り組んでいるので、率直なアドバイスがもらえ、かわり合うことの喜びや充実感を味わえると考えたからである。また、第5次の発表会に向けての練習になるとも考えた。

アドバイスカード

()

フレンドリー調査隊 グループへ

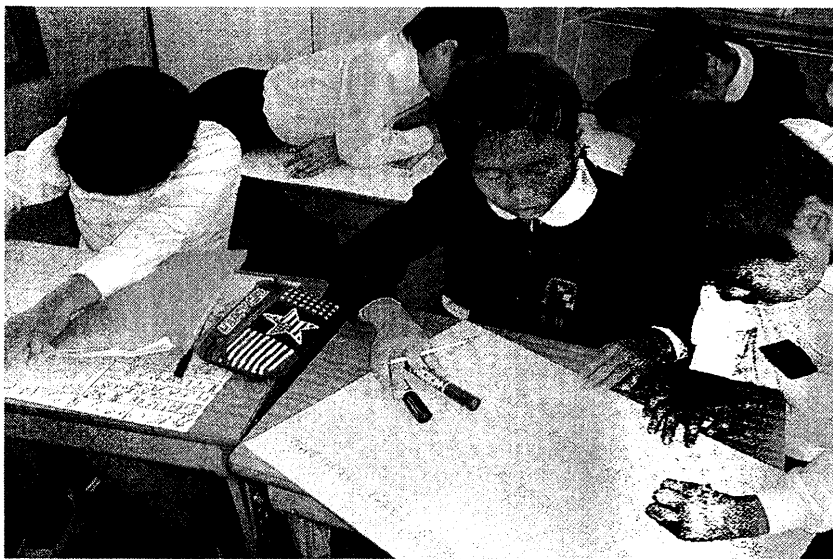
○ テーマにそった「よさ」が見つけれられているか。

よく見つけている だいたい あまり ぜんぜん

○ こんな「よさ」もあると思うよ。

6年生さんが頑張って歩いてる
 写真とは、わりと、アンケートの、長い
 様子と歩いてる、いい時、何と鬼、
 最後まで、参事、いつかなど、調べ
 よと良いと思ふ

保護者からのアドバイス



新聞にまとめているグループ

内容は、中学生に3年生の発表を聞いてもらって、発表方法（声の大きさ・話す速さを考えて・相手を見ながら）やテーマにそったよさが見つけられているかについてのアドバイスをしてもらった。また、総合的な学習で中学生の調べていることについて、話し合いが深まるようにテーマの近いグループごとに交流をしていった。

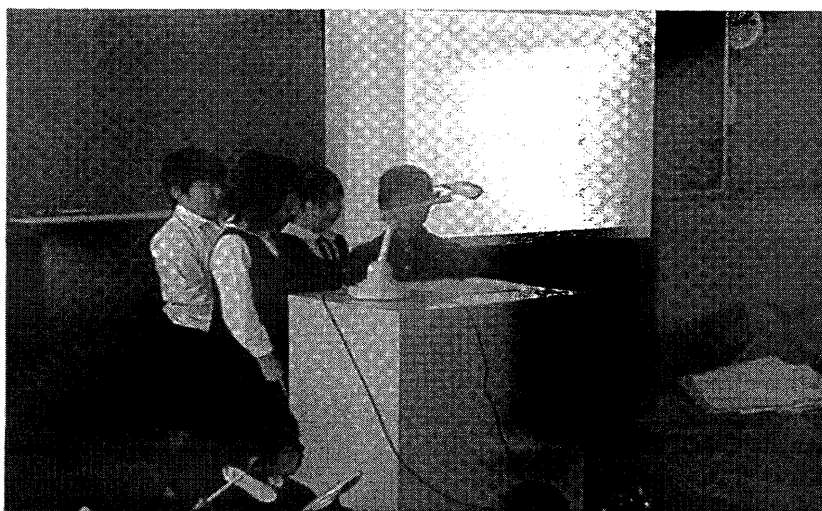


中学生からたくさんのアドバイスをもらったよ

中学生から「もっと大きな声で発表したらいいよ」「あまり下を見ないで発表できるといいね」「自分が発表する所をメモにしたらいよ」などのアドバイスをもらった。この交流会で、自分たちの発表について中学生から直接アドバイスをもらうことで、自分たちの発表を見直し具体的にこれからどのようなことに気をつけていったらよいかのかわかった。子どもたちのふり返りは、次のようであった。

今日、中学生とのこうりゅう会がありました。発表のとき、すごくきんちょうしました。ぼくは、大きな声で発表することをがんばりました。中学の〇〇さんも「声が大きくてよかったよ。」とってくれたのがうれしかったです。でも、グループではみんな早口になっていたところを、なおしたほうがいいと教えてくれました。ぼくたちは、パンフレットを作ったんだけど、色がみえにくかったので発表会までにはなおしていきたいです。中学1年生もそう合でしりょう館を調べていて、ぼくたちとおなじことをしていることがわかりました。でも、ぼくたちよりずっとくわしく調べているので、いろいろ教えてもらいました。今日は、たのしかったです。

⑤第5次 発表会とふりかえり



緊張したけど、みんなで協力して発表したよ

交流会のアドバイスをもとにグループごとに発表会に向けて練習をしていった。発表方法のアドバイスが具体的であったため、どのグループも意欲的に取り組むことができた。

発表会には、保護者と中学生を招待し、保護者には招待状を書いて参加を呼びかけていった。どのグループも発表では、前回の反省を生かした発表をすることができていた。

中学生からは、1回目の発表と比べてどうだったかを評価カードに書いてもらった。内容は四つの項目「声の大きさ」「話すスピード」「相手を見ながら」「よさが伝わったか」についての四段階の評価とコメントとした。子どもたちは、中学生からの評価カードに自分たちががんばったところが、よくあらわれていて満足することができていた。また、保護者からもそれぞれのよさがよく伝わった内容になっていたという感想をいただいた。

評価カード

せいりく グループさんへ

1年A組名前 より

★大きな声で発表できたか。

よくできていた だいたいできていた あまりできていない できていない

★話すスピードを考えて、間をとりながらできていたか。

よくできていた だいたいできていた あまりできていない できていない

★伝えたい相手を見ながらできていたか。

よくできていた だいたいできていた あまりできていない できていない

★発表の内容から「よさ」が伝わっていましたか。

よくわかった わかった あまりわからなかった わからなかった

コメ ン ト

この前やった、文のあがしい所とかも、きりよくあがってよかったです。

今日の発表は、とてもきんちょうしました。それは、お家の人がたくさん来ていたからです。私たちのグループは、相手の方を見ながら発表することを注意しました。そのためにメモをかいて練習しました。わたしは、自分の発表をほとんどおぼえました。お茶室のよさがみんなにうまく伝えられたと思います。お母さんも「よかったよ。」といってくれました。中学生の人たちも「よくできていた」に丸をつけてくれていました。とてもうれしかったです。これからももっと附属小のよさを多くの人に伝えていきたいです。

(6) 成果と課題

本学習では、アンケートやインタビューを通して異学年と直接的なのかかわりが持てたことで自他の違いやよさに少しずつ気づくことができるようになってきている。また、発表会に向けて保護者から具体的なアドバイスをもらったり、幼稚園のころからのペア学年である中学校1年生と楽しく交流したりすることで、活動に対する新しい見方や考え方ができた。また、内容面でもいろいろなアドバイスをもらうことで、自分たちの活動意欲の継続にもつながった。そして、発表会後に中学生からの評価カードで客観的に自分たちの発表をとらえることができ、また、総合的な学習と重ね合わせて道徳の時間を扱うことで、より学習の中身を深めることができた。一連の学習で、自分たちの調べたことや友達の発表を聞いて学園のよさについて認識し、これから大切にしていこうという気持ちを高めることにつながった。中学生との交流を3回行う予定であるが、これからはしっかりと連携を取りながら計画的に進めていく必要がある。

資料 1

活動計画 (全 30 時間)

<p>子どもの意識</p>	<p>「『椿』は昔からあったんだな」 「ずっと続いているのはすごいね」 「形がとてもきれいだったね」 「ほかによさがたくさんあるね」</p>	<p>「たくさんのよさが見つかったね」 「アンケートを早くしてみたいな」 「調査隊をつくって調べたいな」</p>	<p>「写真をたくさんとりたいな」 「アンケートをしていきたいな」 「学園の人にもインタビューしていきたいな」</p>	<p>「パソコンでまとめてみたいな」 「友だちの意見をきいてみたいな」 「しっかり練習したいな」</p>	<p>「発表会を開いてみたいな」 「お家の人にも知ってほしいな」 「学園のよさを大切にしていきたいな」</p>
<p>具体的な活動</p>	<p>「見る」観る！マイスクール附属小</p>				
	<p>第1次 どうして「椿」を踊るんだろう (6時間) ●踊りの先生のお話を聴く ●お話の内容の交流をする ●昔の本や去年のビデオを視聴する ●イメージマップづくりをする ●全体学習計画をたてる ●ふりかえりをする</p>	<p>第2次 「学習計画をたてよう」 (4時間) ●グループを決める グループのテーマ 秋の運動会・せいふく・行事だ いすき・資料館・ふれあい広場・ お茶室・秋休み・昔のものしり・ チャレンジ遠足・学園のみみつ</p>	<p>第3次 「調査隊をつくって調べよう」 (4時間) ●グループごとに調べ活動をする ・学園でのアンケート ・先生や保護者へインタビュー ・取材活動 ●ふりかえりをする</p>	<p>第4次 「発表会の準備をしよう」 (10時間) ●中間発表会をする ●いろいろな方法でまとめる 壁新聞・ポスター・本 パンフレット・新聞 など ●意見交流をする ●中学校1年生と交流する ●ふりかえりをする</p>	<p>第5次 「発表会とふりかえり」 (6時間) ●案内状づくりをする ●発表会をする ●ふりかえりとまとめをする</p>
<p>関連領域</p>	<p>道徳 (学校愛)</p>		<p>特別活動 (中1との交流)</p>		
<p>めざす姿と支援</p>	<p>自己と他者とを尊重する</p> <p>伝統ある「椿」に対するイメージを出させることで学習に対する意欲を高めることができる。</p> <p>○「椿」の映像を見せたりお話を聴かせたりすることで、そのよさについて気づき自分たちの学校を見つめさせる。</p>	<p>自分の追求したいテーマを決めてグループをつくり、協力して計画を立てることができる。</p> <p>○子どもたちが活動しやすいようにワークシートを用意しておく。</p>	<p>テーマを解決するためにグループで協力して調べたり人のかかわりを深めたりすることができる。</p> <p>○各グループの活動内容を交流させていく。</p>	<p>いろいろな方法でまとめたことを交流するなかでお互いに意見を出し合うことができる。</p> <p>○意見交流してお互いによさを認め合わせる。 ○各グループの活動内容を交流させていく。</p>	<p>発表会を通して保護者や学校の仲間に学習の成果を広げることができる。</p> <p>○発表会に保護者を招き、保護者に聞いてもらうことで達成感を感じさせる。</p>
	<p>主体的に問題解決をする</p> <p>「椿」について知ることで、そのよさを実感し、学校に対する興味をもち、学習計画を立てることができる。</p> <p>○ウェビング法を用いて学習に対するイメージを広げさせる。</p>	<p>自分たちで追求したいテーマを決めて役割分担や活動計画を立てることができる。</p> <p>○課題解決の方法を提示し、学習への見通しをもたせる。</p>	<p>テーマを解決するために自分で確かめたり他者に聞いたりして、自分たちで解決することができる。</p> <p>○課題を常に意識し、意欲的に調べ学習をさせる。</p>	<p>自分たちが調べたことをいろいろな表現の方法を使ってまとめ、発表のための準備をすることができる。</p> <p>○課題を常にふりかえらせて焦点がずれないようにさせる。 ○発表の視点を提示し、相手を意識した発表の練習をさせる。</p>	<p>相手を意識してわかりやすい内容の発表をすることができる。</p> <p>○友達の発表を聞いて自分なりの考えをもたせる。</p>

「学園のリーダーとなる今」

中学校 二畑 芳信

(1) 学 年 中学校 第2学年A組 40名

(2) 総合単元設定の理由

中学校2年生という学年は中学校生活にも慣れ、前年、入試で入ってきた新たな仲間とも良い関係を築きながら学年集団がまとまり始める学年であり、また、1年生が入学し、所謂先輩風を吹かせたいのと同時に3年生に対しては後輩の立場で接するという人間関係の中で自分を確立していかなければならない学年と捉えている。

そのためには「学年の構成員にほとんど変化がないことにより、同年代の子どもたちのお互いに対する見方は固定的になりがちで友人に対する新たな認識を持ちにくい」また「所属する集団に対してなれ合いの気持ちが強く、人や集団との関係を調整して損をするよりも、黙って見過ごしてしまおう」という生徒実態を変えていかなければならないと考え、2年生の当初からやがては最高学年として新たな学園を作り上げる必要があるということをあらゆる教育活動の中で指導してきた。

本学園では前期は3年生が中心となり、自伸会（本学園の生徒会の名称）活動やクラブ活動、学校行事を運営している。夏休み後、クラブ活動の多くは2年生にその中心が移行し、9月の運動会後は行事などの準備（本学園ではワーキングと呼んでいる）も2年生に任されるようになる。12月の自伸会役員選挙をもって完全に2年生が様々な場面でのリーダーとして活躍するようになっている。

こうした中で異校種・異学年とのかかわりという点では、現在の小学校6年生は自分たちが本学園の最高学年になったときに入学してくるので、彼らとどのようにかかわれば良いか考えさせることで次年度の本学園のリーダーとしての意識の高揚を図りたいと考えた。

本実践は、こういった考え方を背景に持ちながら、2年生を対象に自分を取り巻く人々の存在とその人々にどう接していくことで自分が成長し、それが学園のさらなる発展につながるかを気づかせることを意図して行ったものである。

(3) 学習計画

第1次 クラブ活動での「礼儀」とは（道徳）…1時間（5月）

第2次 「学園のリーダーとなるために」

・運動会の実施（学校行事）（9月）

・運動会を振り返ろう（道徳）…1時間（11月） 実践例1

第3次 「新入生を迎えるために」

・小学生とのクラブ交流（特別活動）…3時間

・小学生の疑問などに応えよう（道徳）…1時間（12月） 実践例2

・入学のしおりを作成しよう（特別活動）…2時間（2月）

(4) 実践例 「運動会を振り返ろう」（道徳）

① 日 時 平成15年11月11日（火）

② 主 題 学級や学校の一員としての自覚を持ち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。4-（7）

③題 材 「運動会を振り返ろう」(自作資料)

④生徒の実態

生徒は今夏、総合的な学習の時間の一単元として社会体験「わくわくWORKみはら」を行った。他人と接する際の言動や礼儀の大切さ、また、物事を計画的に実施していくことの大切さや掃除の大切さなどを学んだと感想を抱いた生徒も多かった。しかしながら、そのことを実際の学校生活に生かしている者はまだ少ない。

本学園の運動会の「応援パフォーマンス」は3年生が中心となり、自由参加ではあるが、1、2年生に参加を呼びかけ、練習し、披露するものである。昨年は、3年生の参加が減り、1、2年生は全員参加という中で実施された。今年の運動会は「応援パフォーマンス」に2年生の多くが参加しなかった事態が生じた。参加・不参加の理由はそれぞれあり、学年集団そのものはそのことで対立することもなく、逆に文化祭などの取り組みでは結束することのできる集団になっている。しかしそれぞれの行動を見てみると無批判に同調する者もあり、自分の意とは異なった現象に対して正面から意見を述べ、主張することが少ないという課題も明らかになった。

⑤授業の概要

導入では、11月20日に行われる文化祭のクラス劇の取り組みについて実行委員の感想を紹介した。

T：先日の土曜日に練習をしたが、休みなのに全員来てくれて実行委員は感極まった。その時の心情を話してほしい。

S：劇は演ずる者ばかりでなく、照明や大道具、小道具の係などがいいものにしたいという気持ちになって初めてできるものだという事に気づいた。だから参加した人に感謝したいと思った。

T：少し遅くなったが、今年の運動会はどうであったか、感想を教えてください。

S：B組と良い意味でいい勝負ができたと思う。

T：(「応援」に関しての意見は出なかったの)何か課題となったことはなかったかな。

S：私も含め、応援パフォーマンスに出ない人が多かったことが課題です。

T：では実態を知りたい。(参加した人、不参加の人を挙手させ、席を移動し、グループとした。)

参加者	男子	5名	女子	7名
不参加者	男子	15名	女子	13名

T：さらに途中から参加した、途中で辞めた人はいないか。

途中参加	男子	2名	女子	0名
途中脱退	男子	1名	女子	13名

T：ということは、男子は5名の内、2名は途中から参加したということで最初からは途中脱退の人を入れて4人だったわけだ。女子は最初は20人全員いたが途中で13名が止めたというわけだ。それぞれの理由をワークシートに書いてほしい。(5分間で理由を記入させる)では、何人かに発表してもらおう。(以後、参加者男子は○印、女子は□印、不参加者男子は●印、女子は■で表記する。発表内容とシートより抜粋)

- a ○最初は練習がめんどくさかったので参加しなかった。だけど先輩が「今年は人数が少ない。俺等は今年で最後じゃけ出てくれないか。」と言うのを聞いたら参加しようと思った。赤組の人数が少ないので僕が出て少しでも赤組が勝てるようになればと途中から参加した。
- b ○出たくなかった。でも抜けれなかった。先輩にやられるから。
- c ○自分は最初はやる気は全くなかった。でも先輩たちが「応援団」に入ってくれと必死に言ってきたので入った。
- d ○中学校3年間の内、3年生になると出られないと思って、最後の思い出として参加した。
- e □やめる理由がなかったのでやった。3年生とぎくしゃくするのも嫌だったし、私が3年生だったらごそっと抜けると迷惑だろうなあとと思ったから辞めなかった。
- f □参加しなかった人は多分先輩からの悪口を理由にする人が多いと思うが、辞めると言うことはそれを認めてしまうことだから最後までやろうと思った。それに先輩にあまり怨まれたくなかったので辞めなかった。悪口ごときで辞めるのは馬鹿馬鹿しい。
- g □先輩に目をつけられるのが嫌だったから。友達も参加していたから。去年も最初はめんどくさいと思っていたけれど参加してやっていくうちにだんだんと上手になっていく過程がおもしろく、楽しかった。当日やり終えた達成感があった。親に「応援に出る。」と先に言っていたから。先輩の立場だったら人数が少ないのは大変なことになると思った。
- h □1年の時も参加して大変だったけれど楽しかったから今年も出てみたいと思った。先輩にも「絶対出てね。」と言われたから期待を裏切りたくなかった。
- i □踊ること自体好きだったから参加した。
- a ●去年の経験からすごく疲れて帰ったらすぐ寝てしまいそうだったから。「声だし」で声がかかるのが嫌だった。
- b ●別に参加しなくてもいいことになっているし、練習が面倒で疲れるし、放課後残らないといけないから。
- c ●小学校の時見て絶対に入りたくないと思った。理由は①周りの雰囲気・内容が時代遅れ②応援のように見えない。(ドラム缶を叩いて拳法みたいなことをやっているだけ)③さわやかでない④3年生の天下だから1年の時も出ていない⑤自由参加だから
- d ●パフォーマンスの内容が前よりへボかった。今年の3年生の人数も少なかったし、3年生が嫌だったから。
- e ■「わくわくWORK」で2年生は練習が遅れていたから夏休みが終わっても全然踊れなかった。なのに3年生に「なんで2年は下手なのか。」とか言われてやる気がなくなった。それがすごく嫌だった。途中辞めは無責任だと思ったけれど辞めた。
- f ■「わくわくWORK」で遅れてそれでもがんばろうと思っていたのに裏で先輩たちが悪口を言っていたと聞いたのでやる気がなくなった。先輩たちだけが悪いのではなく、私達も悪いとは思ったが自由参加なのでこんなことまでされてやりたいとは思わなかった。
- g ■クラブで先輩と喧嘩したとき「プライベートやクラブ以外のことでワルとか言わないで下さい」と言ったはずなのに「2年生は下手」とかまた言われたから。

不参加理由は男子の「しんどいから。」「自由参加だから。」「他にしたいことがあるから。」というのが多かった。これに対し女子は3年生とのトラブルでやる気を失ったり、踊りが難しいのでついていけないと感じたりしたからということが圧倒的であった。

T：理由はわかったと思う。参加した人、少人数でどうだった？

S：演技者が少ないので寂しかった。

T：少ないなら友達を誘ったりしなかったのか。また、不参加者は誘われなかったのか。(誘ったり、誘われたりしたが、参加するには至らなかった者がほとんどであった。)

T：では来年はどうするのか。今年参加しなかったけどしたい人とかいるとは思いますが、どうか。

参加者 男子5名中3名はやめる

不参加者 男子2名がやりたい

女子は今年通りの結果

その中で「今年しなかったが、来年はやりたい。」というある男子の意見は次のとおりであった。

S：自分は中学から附属中に入ってきた。今年は途中で体調を崩し、辞めたが、この学年でやれる最後の運動会なのだからやりたいと考えている。

T：でも来年はやりたいと言って今の段階では今年よりも参加者が少ないではないか。やはり応援は嫌なんだろう？男子は「若い力」(組体操)は大好きで女子は「椿」(身体表現)が大好きなのか。

(「そんなことはない」という言葉が飛び交った。)

T：なぜ「若い力」や「椿」は「面白くない。」とか言って辞めないの？

S：強制されている種目だからしないといけない。

S：授業で扱っているから出ないといけないと思う

S：「椿」はもう10年しているので踊りも知っているから簡単にできるから。応援は毎年踊りが違うので覚えないといけないから難しい。

T：強制されているから、授業でやらされているからやるのか。自由参加だから応援パフォーマンスはしないのか。では、なぜ先日の土曜日、文化祭の練習に来たのか。自由参加だったし、初めてやる内容だったぞ。

S：役者だったから。動きやせりふを覚えていなかったから来た。

S：応援パフォーマンスほど疲れないから来た。

S：クラスの中では悪口は言われたいから来た。

S：文化祭はクラスの団結が持てるけれど応援パフォーマンスは団結ができないから。

T：わかった。じゃあ来年、3年生として君たちは参加するのは少ないので1、2年生にやってもらって君たちは見る立場になるのか。また、この応援はなくなってしまうの。どうなのだろうか。

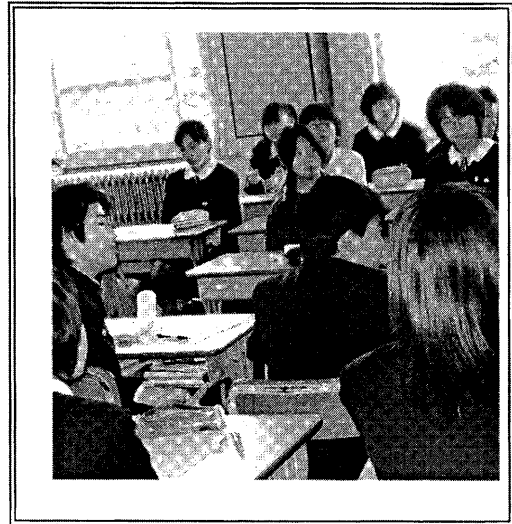
S：附属の伝統なんだからなくしたくない。

S：(今年の参加者b○の生徒)なくなってもいいと思うが、OBなどがいろいろと文句を言うと思う。

T：今日の授業で感じたことと今後どうしたいのか今の気持ちを書いて終わりにしたい。



【来年はどうするの？】



【困ったな どう考えようか】

授業後、回収したワークシートに書かれていた意見を紹介すると

○今年参加した男子の意見

- ・応援団は来年も出ようと思う。
- ・参加しようと思いたい。
- ・迷っているが…
- ・もうなくせば良い。
- ・あまり出る気はしないが、なくなると寂しい。

□今年参加した女子の意見

- ・やはり残したい。保護者など楽しみにしている人がいる。だけど人数が少ないとできませんね。
- ・めんどくさいという人は参加しなくても良い。そうしたら人数が少なくなってしまうが最後までやり遂げたい。
- ・応援パフォーマンスがどういう経緯で演目に決められたかそこをまず知らなければこの現状を打開することはできないと思う。
- ・これからも応援パフォーマンスは頑張りたい。私たちが動かないと後輩は動かない。
- ・上級生と下級生の仲が冷えた時こそ、応援は大切だと思うから続けていきたい。
- ・後輩のことを考え、3年らしくやりたい。

●今年不参加の男子の意見

- ・中心になって動いてなくなりたいようにしたい。
- ・後先のことをよく考えていきたい。人に望まれるなら何事もやってみるべきだと思った。
- ・思い出を残すためにも3年になったらやっておきたいと思えた。
- ・このままだとなくなるから参加しようと思った。
- ・みんなが参加できるようにしたい。
- ・伝統だから残しておいて人数が少なく中途半端になるくらいなら無くした方が良い。
- ・やはりやりたい人がやればいいのであって自分は参加しない。
- ・やる意味を感じない。

- ・今回の応援は正直迷った。結局出ていないことは言い訳にしかならなかった。もう少し3年生ややっている人の気持ちを考えれば良かった。

■今年参加しなかった女子の意見

- ・参加するかどうかわからないが、下級生のことを考えられる3年生にならないといけないと思った。
- ・強制参加か何か違うやり方で残していったら良いと思う。得点方式にするとかちゃんと意味あるものにしていきたい。
- ・形を変えてダンスを発表するようにしたらどうかと考えている。
- ・今は自分のことを中心にしか考えていなかったけれど3年生になると学校全体のことを考えなくてはならなくなるなあと思った。
- ・いきなり言われても。今の私には考えられないからもう少し考えさせてほしい。もう最高学年になるのだなあということが少しわかり始めた。
- ・自分たちが優しくすれば絶対下級生もついてきてくれると思うのでまず優しく接していきたい。
- ・来年はみんなでやれたら一番良いと思った。
- ・やる内容によって変わると思う。
- ・少しは我慢するときもないといけないのではと思った。
- ・やはりやりたい人がやればいいし、2年生が中心となったとしてもいいのではないか。どうしてもやりたくない人はやらないのが良いと思う。

⑥授業を振り返って

本実践は、「応援パフォーマンス」に参加した者が極端に少なかったという今年の運動会を題材にし、その時の心情や考えを互いに知ることから始め、次年度、異なる考えを持つ同級生や下級生との関係をどう持つかを考えさせるために実施した。不参加生徒にとっては今更何をという心の中にしまい込んだ心情を見つめさせる事となったが、何人かは自分のとった行動をきちんと発表できた。

しかし果たして本当にそれが真実なのかという点では心の奥底にあったものを吐露してはいないと感じた。男子は初めから自由参加だから、昨年やってみてしんどかったという点で本音に近いものが出ていたが、逆に女子は全員が一度は参加し、練習も積んでいた。3年生から言われた言葉に実際は一部の者がそれまでの人間関係から反発し、脱退してこうと決意した。それに同調した者また本当は続けたかったけれど同級生との人間関係で脱退した者とさまざまなものがあつたはずである。

しかしながら、辞めていった理由を3年生の指導の不十分さにあると全員が述べている点が気にかかった。特に女子は「やり方を変えてやりたい。」とか「後輩に優しくしておきたい。」など来年はやりたいと感じてはいるが、今年脱退した負い目からそれを全面に出して自らがリーダーとなることに躊躇している。これは今年参加した友達に対しての遠慮でもあるし、迷いでもあると感じた。また、3年生に言われた「悪口」というのが果たして自分の全人格を否定され耐えることができないものであつたかどうか、単に自分にとって都合の悪いだけのものであつたのではないかということについて、授業中に考えさせられなかった。(この点はその日のSHRで補足した。)

さらに参加した者の中にも「出たくなかった。でも抜けられなかった。」「先輩に目をつ

けられるのが嫌だった。」と消極的な参加をした者に対して深く追究することができなかった。また「先輩たちが『応援団』に入ってくれと必死に言ってきたから。」とか「期待を裏切りたくなかった。」という考えもあり、3年生の心情を考えた行動をとった人たちの考えについてももっと追究すべきであったと思う。

(5) 実践例2 「小学生の疑問などに応えよう」(道徳)

①日 時 平成15年12月5日(金)

②主 題 自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。4-(1)

③題 材 「小学生の疑問などに応えよう」(自作資料)

④生徒の実態

2年生になりそれぞれのクラブで後輩との関係で問題が少しずつ出始めてきた。そこで、5月、道徳の授業でクラブ活動での「礼儀」とは何かを考えた。授業の中で書いた「1年生に対して感じていること」という作文からいくつかを紹介すると、「私の部活の中でもタメ口(馴れ馴れしい言葉遣い)を使って話している人がいるけれどその人は多分、小学校の頃、上級生ととても仲よしだったからタメ口を使っているのだろうが、中学は違う。中学校からは職場体験とか色々大人と接していくことが多い。だから、日常的に敬語を使っていた方がいい。」とか「もう小学生じゃないんだし、上下関係があるのは当たり前。実際社会だってそう。私が1年生の時も2年生、3年生に気をつかっていたし、先輩になってなめられても困る。」というように1年生の言動を快く思っていない者が多かった。中には「もともと礼儀は強要するものではなくて、自ら相手を敬ってこそすばらしいものとなると思う。本当の和を求めるならもっと民主的にし、互いに好きにならないと難しい。礼儀を求めるのは昔の伝統であるが、和ではない。」とか「たった1歳や2歳、歳が離れているだけでそんなに言われたら嫌です。廊下で会ったらいちいち何か言うのは馬鹿馬鹿しい。」と考えている者もいた。

このような1年生に対する思いを抱きながら生徒はそれぞれのクラブ活動において3年生と共にチーム作りを学びながら次第に自分たちがクラブ活動の中心になっていくことを自覚し始めた。

こうした中で生徒は10月の下旬から、クラブ活動交流を小学校6年生と行った。その時の小中学生それぞれに対して行ったアンケートを分析してみると交流することで、中学生は自らの力でクラブ活動を運営していく能力が高まっていったことが明らかとなった。このことはこのクラブ交流を通じて小学生との関わりが有効に働いたものと考えられる。

⑤授業の概要

導入では、小学校に入学した頃の写真を提示し、その時の学校生活に対しての期待や不安を思い出させようとした。

T:非常に懐かしい写真かも知れないが、当時のこと覚えていますか。

S:(あまりに前なので反応は懐かしさだけで当時の心情までは覚えていないという)

T:では、中学校に入学した時、何か不安とか期待とかなかったらどうか。ワークシートに記入して下さい。(記入後)では発表してもらいます。

S:上級生との関係がうまくいくか心配だった。

S:勉強が難しくなりそうと思った。

S：僕はみんなと違って中学校から入学したから全てが不安だった。

S：いじめがあるかどうか不安だった。

(10数人から主に人間関係や学習面での不安が出された。)

T：勉強のこととか人間関係とかいろいろ不安があったんだろうね。



【小学校入学時の写真】



【中学校入学で不安はなかった？】

T：まず、この前のクラブ交流はとても有意義で君たちから色々なことを教えてもらって自分もそんな先輩になりたいと思ったという人が多かったようです。では、今日は今の6年生はクラブ活動だけでなく、中学校生活全般に対してどう思っているか。先日、先生が6年生のクラスで児童に授業で聞いてみたので紹介します。(6年生の不安や疑問を紹介する。)

学習面

〔授業〕

- 楽しい授業はたくさんありますか。(いやな授業はありませんか)
- どんな教科がありますか。
- 授業時間は何分ですか。1日に何時間ですか。
- 英語は難しいですか。国語はおもしろいですか。書写(毛筆)はありますか。
- 塾に行かないとついていけないんですか。
- 一番持ってくる物が多い教科は何ですか。

〔宿題〕

- 宿題はあるのですか。
- 宿題は多いですか。どの教科が多いですか。

[試験]

- テストは難しいですか。
- テストはいっぱい いっぱいですか。
- 月に何回ぐらいありますか。
- いきなりテストすることはありますか。あったらその教科は何ですか。
- 成績が悪いとどうなるんですか。

生活面

[対人関係]

- いじめられることはありますか。
- 3年だからといっていばる人はいますか。
- 他の学校から来る人と仲良くなれるかどうか不安です。
- 先輩に対してどんな言葉遣いをしたらいいのか教えてください。

[クラブ活動・下校時刻]

- クラブは何時から何時までですか。下校時間は何時ですか。
- 帰って遊ぶ時間はありますか。
- 土日もあるのですか。
- クラブで楽しいことは何ですか。
- ひまなクラブはありますか。
- 野球部がないのはなぜですか。

[学校のきまり]

- 絶対にしてはいけないことは何ですか。
- 小学校と違う規則は何ですか。
- いらぬ物を持ってきたりしていますか。持ってきて良いのですか。
(漫画、携帯電話など)
- 靴下のワンポイントはいいんですか。

[昼食]

- お弁当の良い点と悪い点は何ですか。
- パンはおいしいですか。おすすめのパンは何ですか。パンの種類と値段
- 早弁をしたことがありますか。見つかったらどうなりますか。

[休憩時間]

- どんなことをして遊んでいますか。
- 大休憩はありますか。
- 休憩は何分ありますか。

先生

- どんな先生がいますか。
- こわい先生ややさしい先生、おもしろい先生を教えてください。
- 中学校の先生はやさしそうだけど本当の怖さはどのくらいなのか知りたいです。

行事

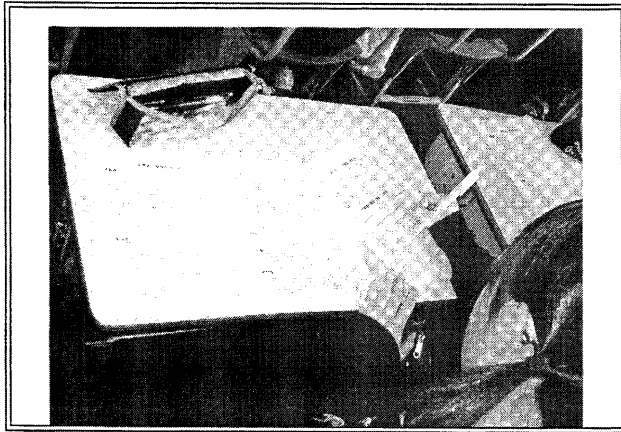
- どんな行事がありますか。文化祭は楽しかったですか。
- 女子の応援パフォーマンスに出なかったらいやな目で見られるって聞いたことがあるけど本当ですか。
- 男子の応援パフォーマンスはすごく難しいですか。

その他

- 校内はきれいですか。
- 階段は使いやすいですか。
- 委員会や自伸会は大変ですか。
- どれくらいで中学校生活に慣れますか。
- 図書室の本の数はどれくらいですか。
- そうじはありますか。
- 入りたくない場所がありますか。
- 楽しいと思う時はどんな時ですか。
- どんな種類の本が多いですか。

T：これらの質問に答えて、実は「新入生のしおり」（毎年教師が作成していたもの）を自伸会で作ってみてはと思っています。今日は全ての項目は無理だから、「試験」と「対人関係」の項目についてこれから回答を作成して下さい。できたら班で一つだけ選び、発表して下さい。その時、どうしてその回答を班として選んだかを説明して下さい。

S：（小学生の質問事項にまず、個人が回答案を作成する）
（続いて班でこの回答ならと考えたものを検討し合う）



【質問にどう応えようか】



【こんな回答で良いですか？】

T：では回答をみんなで検討しよう。よく聞いてどんな点が良かったか、いけないと思ったかを他の人に発表してもらいます。

S：私たちの班は「試験」の項目の回答です。

あまりに成績が悪かった場合は、補習があります。またテストは確かに難しい教科もありますがきちんと毎日ドリルをやったり、復習をしていれば80～100点ぐらいは取れるはずです。数学は1年生の時は90点以上とるのは簡単ですが、2年生になるとなかなかそうはいかないと思います。テストは前期にマークテストがあるので4回、後期は3回です。この中には9教科が2回、5教科が5回あります。中学校での成績は後にひびくので、毎日の復習を忘れないようにしましょう。

この回答を班で選んだのは、具体的に回数や点数を教えることが大切だと思ったからです。

T：この班の回答でよいでしょうか？

S：具体的である点はいいんだけど点数までを出してしまうと、もし、実際のテストでその点が取れなかった人はショックだろうからその配慮がいると思います。

S：テストの回数は良いが、点数を出して説明し、がんばれと言うのはどうかと思う。

T：では、あなたの班ではどう回答案をつくりましたか。発表して下さい。

S：私たちの班も「試験」の項目です。

テストは教科の先生ごとに問題の出し方とか変わってくるけれど、教科書がそのまま出る時もあるれば、応用もあったりするので難しいものは難しいです。テストの回数は定期的に行うのでそこまでたくさんないです。それといきなりテストすることはほとんどないです。もし小テストとかやるのなら事前に教えて下さると思います。成績が悪いとどうなるということはないけれど努力して成績がよくなるようがんばれば良いと思います。

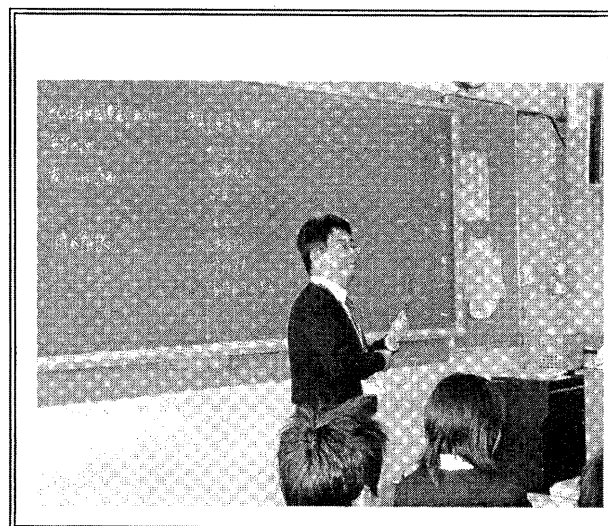
T：さてどうでしょうか。

S：後の班の方が「試験」に関しては良いと思います。（そういう意見多数）

T：回答の仕方をまとめると「優しさが必要。」「具体的に書いた方がいい。」「体験や経験を載せるといい。」など出ました。これから実際に「しおり」づくりに取り組もうと思うからみんなも清書するときはこれらを考慮した回答を作成して下さい。



【先ほどの意見に反論します】



【今日のポイントまとめるぞ】

⑥授業を振り返って

異校種、異学年との交流を意図的に本年度は実施した。クラブ活動の交流は小学生にも中学生にも好評であり、成果も上げた。本実践では、目標設定を毎年学校側が作成する「新入生のしおり」に中学校生活に対する不安を払拭してもらうために先輩としてどんなアドバイスができ、それを新たに掲載するというものにしたので、生徒たちも「顔の見えない相手」に対して自分の今までの経験と相手に対しての思いやりをもって回答案を考えていったと思う。また、生徒は小学生の中学校生活に対する不安について自分もまさにそのような不安を持ちながら入学してきた経験から小学生に対してどのようなアドバイスをすべきか真剣に考えたと思う。

具体的には授業の中で文末表現を「～するといいよ」というように優しい表現の方が小学生に対しては安心感が与えられるという意見や、さらに前述した「試験の点数を具体的に出したほうが良いのか」という課題に直面したとき、「具体的である点はいいんだけど点数までを出してしまうと、もし、実際のテストでその点が取れなかった人はショックだろうからその配慮がいます」という反論が出た点からも生徒自身、他者にどう関わっていくかを真剣に考え相手の立場になっていると言える。

しかし、時間不足から生徒の回答案を検討することが不十分であった。特に「具体的に回答」することは重要な点ではあるが、生徒の意見交換にあるようにテストの点数まで具体的に出すようなことはかえって良くないのであるということをアドバイスを受け取る側からするとどうなのだろうかなどといった点をもっと深める必要があったと思う。

そこで、後日しおり作成の原稿作りを行った際に本授業のまとめを再度確認しながら原稿作成をするよう指導した。その時作成された2点を紹介する。

[試験について]

テストは今までの経験から言うと難しいときは難しいけれど、簡単な時は簡単です。教科の先生によってはテキストの問題をそのまま出す先生もおられました。範囲は1週間前になると発表があるのでそこを勉強しておけば大丈夫です。でも自分の経験からして1週間前からでは遅すぎることもあったので2～3週間前とか、普段からコツコツやっていたらかなり楽です。とりあえず5教科（国、社、数、理、英）の出る傾向としては

国語→漢字と授業でやった内容や文章。問題をよく読んで！！

社会→とにかく復習！！努力が報われる教科。

数学→時間配分を考えた方がよい。

理科→先生によるけれど記述が多いから言葉の意味を覚えればよい。

英語→教科書の抜き出しが多い。1年生後期になると自由作文とかもたまに出る。

リスニングは2回しか流してくれない。

テストは5教科が年に3回。9教科が年2回で計5回だよ。がんばれ！！

[対人関係について]

私が入学する前「いじめ」があったと聞いたことがあったけれど、私が実際に過ごしてみて「いじめ」というのはありませんでした。それに私たちの学年で「いじめ」はありえん！と考えている人がほとんどで、逆にいじめていたら止めると言うから安心していいと思うよ。

他の学校から来る人とはいつの間にか自然に話せたりするからあんまり深く考えずに楽しそうに話しかけてあげたら仲良くなれるよ。

先輩に対しては普通は「敬語」で話します。でも仲良くなったらある程度を越えなければ挨拶とかも気軽にタメ口でしてくれたらいいと思うよ。もし、心配なら先輩に直接聞いてみればいいよ。聞いて怒られることはないと思うしね。かかわらないほうがいい人は特にいないし、もし悪いイメージがあっても話してみれば実際はちがってこともよくあります。なるべく自分から積極的になっていけば楽しく過ごしていけると思うよ。

(6) 成果と課題

実践例1から「学年の構成員にほとんど変化がないことにより、同年代の子どもたちのお互いに対する見方は固定的になりがちで友人に対する新たな認識を持ちにくい」また「所属する集団に対してなれ合いの気持ちが強く、人や集団との関係を調整して損をするよりも、黙って見過ごしてしまおう」という生徒実態が今回の応援パフォーマンスの問題でもあらわれた。「かわり学習」を今後充実させるにはまずは学級、学年という直接所属している集団にどのように自分は関与し、存在しているかを見つめさせる必要があると考える。集団が大きくなればなるほど彼らはそれをどうまとめて方向付けるべきかを見失いが

ちで他者の考えを受け入れたりすることがなかなかできなくなり、力関係と損得関係に従ってその方向が定まっていく気がしてならない。また、この件について3年生や1年生はどう考え、2年生をどう見ていたかを検証していく必要も感じた。

次に実践例2から明らかとなった課題として、今回は教師主導でクラブ活動交流会やしおりづくりを提案し、異校種、異学年との交流を指導してきたが、これを生徒たちの活動、とりわけ自伸会活動として今後、「クラブ活動交流」の定例化や「しおりづくり」を行わせたりすることが「かかわり学習」をより深めさせることにつながるのではないかという点が考えられる。また、「しおりづくり」から発展させ、6年生の質問をVTRに本人登場という形で、回答者もVTR登場という形や実際に対面しての質疑応答もおこなうという直接相手とかかわることを今後目指す必要があると思う。そして、「かかわり学習」を通してのめざす子ども像に迫るためには、やはり毎日の生活で自分自身を見つめさせながら、自分以外の人や物、そして自然などに目を向けさせ、考えさせるようにしていきたいと思う。